

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行  
第8回フォーラム研究会  
議事録

日時：平成26年1月21日（火） 13：00～16：00

場所：パブリック・アウトリーチ本部事務所

出席者：14名（順不同・敬称略）

木村（PONPO）、足立（元気ネット）、植木（元気ネット）、円満字（PONPO）、  
大石（PONPO）、神崎（PONPO）、鬼沢（元気ネット）、久保（PONPO）、  
渋谷（元気ネット）、竹中（PONPO）、中岡（元気ネット）、丸山（PONPO）、  
諸葛（PONPO）、三谷（原子力コミュニケーションズ）

配布資料

F8-0. 議事次第

F8-1. 第7回フォーラム研究会議事録案

F8-2. フォーラムのシステム化について

議題

0. 議事録確認
1. フォーラムのシステム化について
2. その他

※議論の詳細については、逐語録に記録されている。

## 0. 議事録確認（配布資料 F8-1）

木村氏より、資料 F8-1 に基づき、前回の議事録の確認がなされた。

## 1. フォーラムのシステム化について（配布資料 F8-2）

本プロジェクトの成果として、「フォーラム」の機能を整理する（「フォーラム」のシステム化をする）必要がある。今年度実施された業務を踏まえ、木村氏、竹中氏による整理が行なわれた（資料 F8-2）。

木村氏による説明の後、前回の議論も踏まえて、活発な議論が行われた。主な意見を、以下に項目ごとに示す。

### ○フォーラムがビジネス要件を達成するために満たすべき要件

- ・ 「参加者と目的を共有する」ことも柱として据えるべきではないか。

### ○参加者と目的を共有する

- ・ オリエンテーションで目的を話す。
  - 誘導ととられないように、話す内容、時期の考慮が必要だ。（最初から言いすぎない、中間で確認するなど）
- ・ 目的を短い文章にまとめ、毎回提示するといいいのではないか。
  - 全体の目的に対し、今回はこういうことをしようと思う、という位置づけも示すべき。目的と経過。将来の見込みは書かなくてよい。
- ・ 目的（Objection）とゴール（Goal）を使い分けてはどうか。
  - フォーラムの目的は、立場を越えてお互いを理解し、尊重できるための新しい関係性を生み出すこと＝境界を越えること。
  - 参加者のゴールは、個人によって異なるかもしれない。
  - そもそも参加者（市民）は専門家を信頼したいのか、そうではないのか。
  - 参加者のゴールは、相手が何を考えているかを知ること、相手を知ること、自分が変わっていくこと、などではないか。その積み重ねが、境界を越えることにつながるのではないか。

## ○参加者がお互いに尊重できる

### 1. 参加者間の社会的リアリティの違いに気づく、いろんな考え方があると気づく

#### ①参加者の客観視を導く、参加者同士のコミュニケーションを客観的に見るように導く

- ・ 「人の話をよく聞きましょう」と呼びかけること（前は紙に書いて配布した）。
- ・ ファシリテーターの経験（他の人の話を一歩引いて聞く）。
- ・ グループワークの発表をするためには、他の人の意見を聞いてグループの意見をまとめる必要がある。それがうまくできれば、客観視の助けになるのではないかと。
  - 意見をまとめる過程が重要だ。模造紙の見える化がなされるとなると良い。
  - まとめで終わった後、その内容をグループの中で確認すべきだ（「グループワークの進め方」に、プロセスとして記載する必要がある）。全員で確認ができれば、サブファシリテーターに関与された、という印象が弱まるかもしれない。
- ・ グループワークの発表を聞き、他の人の意見を知ることも大切ではないかと。
- ・ 質問づくりは、他の人の意見を知るチャンスになりうるのではないかと。

#### ②人となりを知るように導く

- ・ 名札をつけ、相手の名前を呼ぶことが大切ではないかと。
- ・ 自己紹介の1分間スピーチで人となりを知ることができる。刷り込み効果、思い出し効果があるのではないかと。
- ・ 休憩時間等の何気ない会話が大切なのではないかと。
  - 運営側にも、にこやかに話しかけ、参加者を緊張させない態度が求められる（何気ない会話ができるような雰囲気作り）。
  - ☆ ただし、バランス感覚が求められる。テーマに関する話題は避けるべき（誘導ととられるおそれがある）。特定の人に偏らず、満遍なく声をかけることが大切だ。
- ・ 付箋の色を分けること（あえてレッテルを貼り、それを越える）。
- ・ 同意のシール（第1回のみ実施）。意見の分布などが可視化される効果がある。

#### ③参加者の冷静なコミュニケーションを導く

- ・ 「オープンエンド」はこの項目の要素ではないかと。（相手を否定しないためにも）
- ・ コミュニケーションのルール化が必要だ。（「否定しない」「人の意見をよく聞く」「人の意見をさえぎらない」など）
- ・ 付箋に書くことで、自分の意見がまとめられるという効果があるのではないかと。
  - まず意見を付箋に書き（意見をまとめ）、次に順番に発表するというスタイルは、他の人が発表している間に自分が言いたいことを考えることを減らす（人の意見をよく聞けるようになる）効果があるのではないかと。
- ・ ブレーンストーミングのルールも明確にすべきだ。（タイムキープ、コメントは後で、事実確認はその場で、などの徹底）
- ・ 記録が公開されることで、満足感を得る方もいるかもしれない。

- ・ 記録の公開は、冷静なコミュニケーションの助けになるかもしれない。⇔「④本音を話し合えるように導く」とはトレードオフの関係かもしれない

#### ④本音を話し合えるように導く

- ・ 「オープンエンド」はこの項目の要素ではないか。
- ・ ファシリテーターが意見を引き出すことが大切だ。
- ・ 若い人が、年上の人に対して遠慮する場面が見られた。
  - 個人の資質にもよるので、ある程度は仕方がないか。
  - （特に若い層は）組織を背負うと自由な発言がしにくくなるのではないか。

#### ●その他

- ・ 「他の参加者から尊重されていると感じる」ことも大切ではないか。 →⑤とする。
- ・ その要素としては、名札をつけて、相手の名前を呼ぶように心がけることが挙げられる。それにより、個人として扱われている、と感じる効果があるのではないか。
  - 特に主婦は、日常生活では名前を呼ばれないことが多い。

### 2. お互いが違っていてもいいんだと思える

- ・ 「オープンエンド」はこの項目の要素ではないか。
- ・ 前提として、コミュニケーションのルールが定まっていること、それが守られていることが求められる。（相手を攻撃しない、否定しないなど）
- ・ インタビューの分析を踏まえ、追加したい。特に、1にない要素が出た場合に、それを2に追加したい。

### 3. 参加者同士が対等である（主に市民と専門家）

- ・ 専門家と市民が同人数であること。
- ・ くじ引きは公平だが、話す機会がなかった人もいたようだ。調整が必要か？
- ・ 親しい人が隣に座ると（特に専門家同士）、そこだけで話が進んでしまう。席配置の調整が必要。
  - 席順まで指定するか？ 柔軟性を持たせておいたほうがいいのか？
- ・ 年齢の分布も均等にするべき。年齢2分割で参加者を選定すると、中年層が少なくなり、高齢層が多くなりがちなのではないか。

### ○フォーラムを実施するために満たすべき要件

※「参加者のやる気」「運営側のノウハウ」を6、7として追加した。

### 4. 参加者同士が公平である

- ・ 専門家と市民が同人数であること。
- ・ 考える、書く、話すのがゆっくりな方もいる。時間的な公平性をどう確保するか。
  - 参加者がお互いの人となり理解し、参加者同士で落としどころが分かってくる

とよい。

- ▶ 運営側には臨機応変な対応が求められる。
- ・ 「平等」ではなく、「公平」を心がける必要がある。

#### 5. 運営側への信頼の獲得

- ・ 総合 F、サブ F のルール化：紙に記載して配布する。それによって、「総合 F、サブ F が勝手に進行している」という印象がなくなる。
- ・ 記録の公開は重要。記録スタッフの確保・育成が求められる。
- ・ 運営者の立場を最初に明らかにすることが必要ではないか。（シンポジウムに出席した参加者から、「今日、初めて元気ネットがどういう団体か分かった」という発言があった）

#### 6. 参加者のやる気

- ・ 謝金はひとつの動機になりうる。
- ・ 誰でも話せる話題を選ぶことが大切だ。
- ・ ほめること、感謝を伝えることが大切だ。
- ・ 欠席に対するフォローは殊更に実施しない。結果の平等は機会の不平等になりうる。
- ・ たまに課題を出すのは効果的。（毎回だと大変だが）
- ・ 名刺はもらわない。名刺を持っていない人（主婦など）もいる。気持ちをなえさせてしまうかもしれない。

#### 7. 運営側のノウハウ

※この項目に関しては、今後も十分な検討が必要である。

- ・ グループワークの進め方やコミュニケーションのルールを紙に書いて配布することが大切だ。書いてあることによって、その場で確認しやすい上に、サブ F が勝手に進行しているという印象がなくなる。（視認性の観点から、色付きの紙が望ましい）
- ・ 事前の予行演習など。
- ・ 参加者が進行に慣れていないときに、運営側は何をすればいいかを検討すべきだ。（慣れてくれば、参加者が自分で時間管理などができるようになる）
  - ▶ 練習をする機会を設けてはどうか。例えば、自己紹介プラス簡単なテーマを設定し、「付箋に書いて、決められた時間内で発表する」ことの練習をする。
  - ▶ いきなり本題に入る前に練習を挟むことで、グループの雰囲気や和やかになる効果もあるのではないか。

## その他

- ・ 「フォーラム」がシステムとして整えば、更なる活用の方法がありうる。
  - 福島の帰還の問題など。知識提供型のコミュニケーションではうまくいかないような場における活用。主体的に住民の人たちが考える。専門家はそれに協力する、というような形。
  
- ・ フォーラムが信頼の構築にどのように寄与しているのか、という観点からの整理も別途必要だ。その際には、例えば、「原子力の専門家は信頼できない」と思う理由に対し、フォーラムの効果を整理してみるのもひとつの手かもしれない。
  - 例えば、「専門家は私たちのことを配慮していないから信頼できない」のであれば、フォーラム内で専門家と会話をし、「専門家には専門家なりの配慮があるのか」と気づけば、解消されるかもしれない。

以上の意見を踏まえ、木村氏、竹中氏を中心に、再度整理が行なわれることになった。

## 2. その他

今後のフォーラム研究会の開催日および議論の内容が告知された。

- ・ 第9回は2014年2月24日（月）13：00～16：00に開催。フォーラム参加者の選定を行う予定である。
- ・ 第10回は2014年3月11日（火）13：00～16：00に開催。フォーラムのシステム要件に照らしたインタビュー分析の結果が提示され、それを踏まえ、今年度のフォーラム研究会の成果をまとめる予定である。

以上